

## 朝鮮に渡ったアメリカ・プロテスタント女性宣教師 ： アメリカ北部メソジスト監督教会海外女性伝道協 会を中心に

著者	朴 宣美
雑誌名	歴史人類
巻	46
ページ	74(51)-56(69)
発行年	2018-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00155239">http://hdl.handle.net/2241/00155239</a>

朝鮮に渡ったアメリカ・  
プロテスタント女性宣教師

——アメリカ北部メソジスト監督教会  
海外女性伝道協会を中心に——

朴 宣 美

# 朝鮮に渡ったアメリカ・プロテスタント女性宣教師 ——アメリカ北部メソジスト監督教会 海外女性伝道協会を中心に——

朴 宣 美

## 目 次

はじめに	51
第1章 アメリカ北部メソジスト監督教会海外女性伝道協会の宣教地認識	52
第1節 朝鮮認識	52
第2節 日本認識	56
第2章 アメリカ北部メソジスト監督教会海外女性伝道協会による女子教育	57
第1節 女子教育の規模	57
第2節 女子教育観	60
おわりに	64

## はじめに

アメリカ北部メソジスト監督教会海外女性伝道協会 (Woman's Friend Missionary Society of the Methodist Episcopal Church、以下、WFMS と略す) は、同教派教会の女性たちが1864年にインドに女性宣教師を派遣したことをきっかけに、1869年にボストンで結成された。WFMSは、立て続けに1871年に中国、1874年に日本、1885年に朝鮮に女性宣教師を送った。それぞれの派遣先ではWFMSの協議会 (たとえば、Korea Woman's Conference, Japan Woman's Conference) が開かれ、その下には宣教区 (District) が置かれた。そして、宣教区はいくつかの巡回所 (Circuit) に分かれた。

WFMSは、1938年、世界の12カ国 (一部はアフリカなどの地域) に31の協議会を開いていた。同年の朝鮮協議会 (The Korea Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church、以下、

KWCM と略す) には、宣教区が 13 ヶ所、所属の宣教師が 40 人で、そのうち、未婚の女性宣教師は 30 人 (中国 85 人、日本 27 人、世界全体 370 人) だった<sup>1</sup>。

韓国における女性宣教師の研究は立ち遅れており、様々な教派の女性宣教師の活動を検証した研究は少ない<sup>2</sup>。それに比べ、日本における女性宣教師の研究は、主に女性宣教師の生涯史、ミッション・スクールの発展史、アメリカにおける海外女性伝道運動史の視点から行われ、蓄積されてきた<sup>3</sup>。多様な教派の女性宣教師が取り上げられており、女子教育の他<sup>4</sup>、女性宣教師が行った多様な宣教地報告を基にして当時のアメリカ女性たちが形成した「地理学的知」を検討する研究<sup>5</sup>まで幅広い。

本稿では、朝鮮に最初に女性宣教師を送り、女子教育を始め、女子高等教育も実施した WFMS を中心に、日韓両国において今まであまり明らかにされてこなかった女性宣教師の認識、とりわけ、派遣される宣教地に関する認識や女子教育に関する認識を考察する。19 世末から日韓併合にいたるまでの日韓関係を考慮し、WFMS (または女性宣教師) は、朝鮮女性と日本女性について、両国にかかわる国際情勢についてどのように認識したかを分析する。また、WFMS の活動の大部分を占めた教育活動を中心に、その規模、女子教育観について検討する。

本稿が用いる資料は、まず、1869 年 6 月に WFMS の機関紙として創刊された *The Heathen Woman's Friend* (以下、HWF と略す) と *Woman's Missionary Friend* (1896 年 1 月号に改称される。以下、WMF と略す)、WFMS の連続刊行物 (年次報告書など) である。次に朝鮮で各教派の宣教師たちが共同で編集した雑誌 (*The Korea Mission Field*、以下、KMF と略す) や KWCM の連続刊行物 (年次報告書など) などを使う。

## 第 1 章 アメリカ北部メソジスト監督教会海外女性伝道協会の宣教地認識

### 第 1 節 朝鮮認識

HWF の 1883 年 2 月号に、WFMS による朝鮮宣教に関する意見が最初に語られた。そこでは、当時、アメリカ人があまり知らない朝鮮女性の状況 (低い地位、家庭生活、慣習など) について、ウィリアム・E. グリフィス (W. E. Griffis) の『朝鮮、隠者の国』を引用して述べたのち、「私たちは、WFMS がそれほど遠くない日に、朝鮮の孤立している女性たちに喜びの福音、すなわち、救いは主キリストから来るという福音の種を蒔くことを望んでいる」<sup>6</sup>と言及された。それから翌年の 1884 年度 WFMS 執行委員会の年次会議で朝鮮に女性宣教師を派遣することが決まり<sup>7</sup>、1885 年に WFMS ニュー・イングランド支部 (New England Branch) よりスクラントン (Mary. F. Scranton, 1832-1909) が朝鮮に派遣された<sup>8</sup>。こうして朝鮮宣教は始まったが、ここでは、WFMS (または女性宣教師) の朝鮮認識、とりわけ、朝鮮女性や朝鮮情勢に関する認識について、19 世紀末から日韓併合をへて 1910 年代にまで見ていく。

まず、朝鮮女性に関する認識について見てみよう。WFMSは、機関紙の様々な記事（書簡、投稿、図書や資料の抜粋など）を通して、世界における異教地の女性たちがいかに悲惨な状況に置かれているかをアメリカの女性たちに告知させた。そこで、異教地の女性たちを見るWFMSの視点があらわになったが、朝鮮女性に関しては、次のような見方を明らかにした。

朝鮮では女性に対する外見的尊重は一応みられる。女性は尊重の対象だと言われたりもする。男性は道端で彼の前を通り過ぎる女性を避けなければならない。彼の顔の前にうちわを開いて、彼女を一目でも覗くことがないようにしなければならない。庶民階級の女性は、顔を隠さず、共同の井戸へ水を汲むために出かけるが、誰も彼女を眺めない。男性が女性に声をかけることは彼女を侮辱することであり、その人は無礼極まる者になる。このように女性に対する形式的な尊重があるにもかかわらず、朝鮮人は女性は道徳的には欠けている存在だと信じている。気概のない存在、いいかげんに名前が付けられる存在、権利も責任も持たない被造物、何人もの男、すなわち、父の娘、夫の妻、息子の母として男に従属する存在だと信じている<sup>9</sup>。

このように、朝鮮文化に見られる女性に対するエチケットを肯定的に捉えつつも、朝鮮社会には女性に対する酷い偏見や差別があると見た。「本当に私たちは、キリスト教の地で生まれたことを神に感謝すべきである」<sup>10</sup>と述べられたように、アメリカ女性の高い社会的地位と正反対に、朝鮮女性は従属的な立場に置かれていると見た。

このように、女性宣教師にとって朝鮮は女性に対する不当な抑圧に満ちた社会だった。なかんずく、女子教育を否定する朝鮮人の考え方（この点は、次章で取り上げる）や、男女の住居分離、女性たちの外出の制約、親戚以外の男性と女性の接触禁忌、不合理的な家事などの生活様式と慣習は、「外」から来た女性宣教師の脳裏に、朝鮮女性の「惨めさ」を刻印した。

たとえば、アメリカ北部メソジスト監督教会が朝鮮に派遣した最初の宣教師ヘンリー・G. アベンゼラー（Henry G. Appenzeller）の妻として来朝し、KWCMに所属したエラ・D. アベンゼラー（Ella D. Appenzeller）は、次のように語った。「私たちは小さい女の子を道端でよく見かけるが、それより大きい女の子は【見かけないので】どこにいると思う？福音の光が朝鮮を照らしており、私たちは彼女らを探し出すことができた。どこに行ったと思う？門のベルを押したと思う？違う。私たちはよりいい方法を知っている。父と兄弟は門に近い建物に暮らしているが、そこには女の子はいない。別のところに行かなければならない。ゲートを2つか3つ通過し、泥の壁に囲まれている別の建物に行くと、私たちは忙しく仕事をしている女性と女の子を見つける」（【 】の説明は筆者、以下も同じ）<sup>11</sup>。

また、スクラントンは、「【教会に来る女性の人数が減った理由を説明する中で】朝鮮女性は裁縫の奴隷だ。男女の衣服は白い木綿だ。この衣服は頻繁に洗わねばならないが、そのつど、衣服をほぼ解き、仕立て直さねばならない。……もちろん彼女らは主日も平日もいつも働く。私たち

はより良いやり方を教えており、多くはそれを喜んで受け入れている。しかし、夫たちや息子たちの考えが変わるまで、彼女たちが生活習慣を変えることは難しい<sup>12</sup>という。

女性宣教師の朝鮮女性に対する思いや見方は、取りも直さず彼女らが朝鮮に来た目的になった。「イエス・キリストの福音が女の子ら【梨花学堂の生徒たち】に宣べ伝えられ、彼女たちに栄光に



朝鮮に渡った WFMS の女性宣教師たち  
HWF (1899, Sep) より

満ちる新しい人生が与えられた。彼女らは【WFMS による教育事業の】最初の結実として、今後、神様が女性に与えてくださった本来の居場所に居座るだろう。つまり、夫の下ではなくそばにいてすべてを共有する立場になるだろう<sup>13</sup>と語ったように、女性宣教師は、朝鮮女性にキリスト教主義の教育を与え、家庭の中で新しい地位や生活を享有するように導いていくことを自己の使命とした。このような女性宣教師の女子教育に関する意識は、次章で詳細に検討する。

次に、宣教活動にも影響を及ぼす朝鮮情勢に関する WFMS の認識を見てみよう。「朝鮮を文明化へ導き、荒れ果てた朝鮮の家庭を文明化しようと、アメリカの『軍事力』が門を開いた。アメリカ人宣教師が平和と善意の知らせをもって真っ先にその門に入ったのは、とても適切に思える<sup>14</sup>と言ったように、朝鮮の「文明化」のためにアメリカやアメリカ人宣教師が果たす役割を高く評価する立場にたっていた女性宣教師は、断片的とはいえ、WFMS 本部に送る書簡などの中に、朝鮮の政治的出来事やそれにかかわる経験や意見を述べており、WFMS 本部も朝鮮の政治変動を考慮した意見を明らかにした。

WFMS が朝鮮に最初に派遣したスクラントンは、1885 年 2 月に横浜に到着し、朝鮮に入る時期を見計っていた。本部に送った彼女の書簡（1885 年 4 月 20 日付）によると、日本滞在中に彼女に朝鮮語を教えたのは、1884 年の甲申政変により日本に亡命していた朴泳孝だった。スクラントンは、同書簡のなかに「私たちは彼【朴泳孝】とほかの人たちに好感を持っている。……彼らは明るく知的である。私は、彼らが権力の座に復帰するように願っている。私はいつか彼らがそうなることを確信しているが、それが朝鮮にとっても良からう<sup>15</sup>と語った。おそらく朴泳孝はスクラントンが会った最初の朝鮮人だろう。朝鮮情勢に関する彼の意見からスクラントンは影響を受け、日本と結んで朝鮮の近代化を目指した開化派の政治的志向に対して肯定的な見方をとるに至ったのだろう。

このようにスクラントンは、朝鮮に及ぶ日本の勢力を決して否定的に捉えなかったが、その点は、日清戦争に関する彼女の報告からも分かる。「日本は朝鮮の独立をただ助けるためにここ

【朝鮮】に来たと主張している。日本は改革を提案しているが、その多くは、もし実行に移せば、きつととても有益だろう」<sup>16</sup>と述べた。

その反面、ロシアが朝鮮で勢力を拡大することに対しては否定的に見た。スクラントンは、ロシアが朝鮮でいかに勢力を伸ばしているかを述べたのち、「ほかの国は黙って見ているだけで、ロシアがアジアで何でもほしいままにするのを見過ごしておくつもりなのか？ いままで私はアメリカの孤立主義は正しいと思っていたが、今は少々積極的な行動に出るのがアジアで戦争を防止するために一番効果的な方法ではないかと思っている」<sup>17</sup>と言う。

このようにスクラントンは、日本の対朝鮮政策には理解を、ロシアの対朝鮮政策には反感を表したが、日露戦争をへて朝鮮が日本の植民地になることに対しては明確な意見を示さなかった。ただ、日本の朝鮮支配に抵抗して蜂起した義兵に対しては、次のように否定的に捉えた。「おそらくあなたたちもご存じのように、この小さい国の一部では平和はまだほど遠い。日本人兵隊と自分らを『義兵』—悲しい誤った名前—と呼ぶ暴徒の一団との間に頻繁に衝突が起こっている。住民はいつどこでその人達とばったり出くわすか分からない。彼らが最初に集結したとき、彼らの目的は、日本人に攻撃を仕掛け、彼らを苦しめ、彼らを追いだすことにあると主張したが、今は、『愛国者』という言葉を真にあてられる人は、彼らの中にはほとんどいない。自国民に対するゆすり、強盗、残酷行為が毎日ではないが発生しており、彼らが侵入した家の人は恐怖に怯える」<sup>18</sup>。周辺に邪悪な義兵にあたる事例があってスクラントンの義兵に対して批判的な態度をとるに至ったにせよ、彼女が国の存亡の危機を前にした朝鮮人側の不安や反感をどこまで理解したかは分からない。

政治的中立を信条とするため、女性宣教師たちは、日韓併合に対する意見を明らかにすることはあまりなかった。WFMS本部も、「日本はこの新しい領土で嚴重に行政に着手しているが、一方の朝鮮は全く不本意であるため、二つの民族を結合する過程で多くの困難に直面するだろう」<sup>19</sup>という見方を示すにとどまった。それ以降、女性宣教師たちは、日本が朝鮮で進める政策が彼女らにいかなる影響を及ぼすかに視線を向ける。特に、朝鮮総督府の教育政策により、公立学校が発展すれば、彼女らのミッション・スクールはかえって遅れをとり、多大な打撃を被る事態が起こりかねないと懸念した。例を挙げると、次の通りである。

朝鮮は今では日本の一部になっており、総督府はミッション・スクールに対して厳しい要件を突き付けている。日本で他の教派のスクールを訪問した時、監督は私たちにこう言った。「私たちが何年か前に日本で犯した誤ちをあなたたちは朝鮮でするなかれ。もしあの時、私たちが学校をもっとよくしていたならば、今日のような状況に陥ることはなかったはずだ」。—彼女は悲しげに付け加えた—「もはや今はあまりにも遅れてしまった。政府は私たちよりずっと先に進んでおり、多くの生徒たちは私たちの学校へ来る代わりに仏教学校の方に入っている」。もし私たちが、イエス・キリストのために何かをするように朝鮮の若い女性らに求め

るならば、私たちは私たちの学校を改善しなければならないが、それを今やらなければならない<sup>20</sup>。

日本の植民地化という朝鮮に生じた新しい局面を向かえて、女性宣教師にとって日本は交渉、競争、対抗の相手となった。女性宣教師は、日本の植民地政策の下で、日本人と交渉かつ競争しなければならないが、また、日本の「物質主義」<sup>21</sup>に対抗し、朝鮮人の中にキリスト教主義を根付かせていかなければならない。これは女性宣教師の間に生じた大きな認識の転換であった。

## 第2節 日本認識

女性宣教師の派遣先の中で日本の場合、女性宣教師が始めた教育から影響を受けるにとどまらず、アジアの国々、特に日本の支配地域に女教師を送った<sup>22</sup>。異教地の女性たちの抑圧性・後進性を「憐れむ」女性宣教師は、日本女性の状況をどのように捉え、日本女性の役割をいかに見たのか。ここでは、日本に渡った女性宣教師の認識を中心に見てみよう<sup>23</sup>。

女性宣教師たちは、日本女性は欧米女性には及ばないが、他のアジアの女性より、社会的地位も置かれている状況も比較的がいいという認識を持った<sup>24</sup>。たとえば、「確かに日本の女性は、インドや中国の女性より束縛されず、より自由を得ている。……日本の女性は多少文明化され、和文を読むことができる。彼女たちに対する私たちの仕事はとても希望的であり鼓舞的である」<sup>25</sup>と。19世紀半ばから日本事情について書き記した欧米人によれば、他のアジアの女性より日本女性の社会的地位が高い<sup>26</sup>。WFMSも日本に女性宣教師を派遣する前から同様の見解を示し<sup>27</sup>、日本に送りだされた女性宣教師たちも同様の認識を繰り返し示した<sup>28</sup>。

しかし、性風俗（売春など）、家庭のモラル問題（側室など）、迷信や偶像崇拜問題からみて、日本の家庭生活は「浄化」「文明化」されなければならないが、それによって、日本は、真の文明国家になりうると見た<sup>29</sup>。女性宣教師は、キリスト教に基づく新しい文明意識を日本・日本女性に吹き込む必要性を見出したのである。こうした彼女たちのビジョンについて、次のように語った。

どの国の文明化もその国の女性が到達した水準の以上には到達できないというのは最もだ。新しい日本のために一番希望に思っていることは、今日の女の子である。彼女たちを強く優しいクリスチャン女性に育てよう。そして彼女たちをキリスト教の影響が全く及んでいない学校に教師として送ろう。彼女たちを都市や地方へバイブル女性として派遣し、彼女たちが会おう人に福音を宣べ伝えるようにしよう。彼女たちがホームの妻や母という人生の最も聖なるその地位を、私たちの母たちが見せた誉れと献身で確立していく機会を、彼女たちに与えよう。これらのことをするなら、あなたは日本に貴重な宝を与えることになるでしょう。それは日本が文明化の一番高い水準に到達するよう助けるだけでなく、日本に堅実で確実な基礎を与えることになるでしょう<sup>30</sup>。

日本に渡った女性宣教師は、朝鮮に渡ったスクラントンの場合と同様、東アジアにおける政治・軍事的衝突において日本に友好的な見方をし、東アジアにおける日本勢力の拡大がキリスト教の宣教や文明化に役立つと見た。日本の軍勢力と資金でアジアに道路や鉄道が整備されるなど文明化が進めば、宣教活動にも役立つと展望した。「日清戦争の勝利は、アジアの3カ国の人々にとってよいことであり、福音化とキリスト教文明化の道が広がった」<sup>31</sup>と。

日清戦争、日露戦争を経る中で、女性宣教師は、キリスト教女性が国家の戦争にいかに関与したかを強調し、国家における日本女性の役割の拡大にキリスト教が貢献しているという見方をした<sup>32</sup>。女性宣教師は、戦争は国家の当然のわざという帝国主義的戦争観を持っていたので、日本国家の戦争に対しても否定的ではなかったことは分かる。さらに、彼女らは、アメリカ独立戦争後の「共和国の母」<sup>33</sup>という新たな女性像やその理念に基づく女子教育の恩恵を大いに受けたので、日本女性が国家の戦争に関与することによって、社会的な役割を獲得し、社会的地位も改善できるという見方に立ち、日本女性に向けて、その点を喚起したのである。

このように、女性宣教師は、日本女性は他のアジアの女性より文明化され、その社会的役割も向上したと見ていた。日本を東アジアにおける文化の中心地として見なし<sup>34</sup>、東アジアの宣教における日本の占める重要性を意識した。しかし、女性宣教師は、日本女性が自分たちと同様、「遅れた」アジアの女性のために役割を果たすべきだと見たかどうか。アメリカ人女性宣教師がアジアにおける日本女性の役割を意識するようになったきっかけは、朝鮮に増え続ける日本人の存在だった。19世紀末から女性宣教師は、朝鮮に渡った日本人への宣教活動を考慮していた<sup>35</sup>。のちに、アメリカから日本に女性宣教師が来ることも重要だが、日本女性が自国のために、また隣国のために献身するようになることも重要だといひ、日本人女性を聖書教師（Bible Women）として朝鮮における日本人社会へ送ろうとした<sup>36</sup>。こうした例から、また、日本のミッション・カレッジなどを出て朝鮮のミッション・スクールで教えた日本人女教師の例<sup>37</sup>から見て、アジアに対する日本女性の役割を促す一定の考えが、女性宣教師の内部であったと言える。しかし、それがどれほど積極的に意識され、そのような日本女性の養成に力を入れたかは定かではない。

## 第2章 アメリカ北部メソジスト監督教会海外女性伝道協会による女子教育

### 第1節 女子教育の規模

WFMSが最も力を注いだ宣教地はインドであったが、表1から分かるように、東アジアにおいては中国に次いで日本に多くの財政的支援が与えられた。しかし、女子教育が他のアジアの国々よりいち早く発達していった日本の場合、WFMSによる学校は少なく（表2参照）、WFMSの日本財政は、中国や朝鮮に比べ増加しなかった。1930年代末にはWFMSの朝鮮財政が日本を追い抜いた。

〔表1〕 WFMS による東アジアにおける年間財政 (単位: \$)

年度 \ 国	中国	日本	朝鮮
1886	46,203	37,674	9,447
1938-39	129,986.20	64,976.84	69,475.88

出所: *HWF* (1886, Dec.) , p163; *Year Book, WFMS*, 1939, p.127.

WFMS が東アジアで展開した女子教育の規模をみると、中国の場合、日本と比較して、学校数は多いが、学生・生徒数は少ない。朝鮮の場合は、初等教育が中心になっているが、日本の場合は、中等・高等教育が中心になっている。前章で検討した WFMS の宣教地認識は、宣教地における女子教育の展開にどのように影響したか、今後、詳細に考察しなければならない。

〔表2〕 東アジアにおける WFMS による女子教育\* (1938年10月現在)

学校 \ 宣教地	カレッジ		中等学校		初等学校		幼稚園		総教師数	
	学校数	学生数	学校数	生徒数	学校数	生徒数	園数	園児数	宣教師	ネイティブ
中国	4	377	38	2,524	163	11,805	6	2,212	41	840
日本	3	612	6	2,656	-	-	20	1,242	25	306
朝鮮	1	239	3	938	86	9,307	22	3,140	17	371

注1) 初等学校に併設されている幼稚園の場合は、幼稚園数にカウントされず、単設幼稚園のみが数えられている。  
 注2) カレッジの場合、WFMS 単独の他、各教派連合カレッジも含む。また、カレッジレベルの学種学校も含む。  
 \* 初等学校および幼稚園は男子生徒・園児も対象になっている。出所: *Year Book of WFMS*, 1939, p.148-159.

WFMS が朝鮮で実施した女子教育の実態を見ると、1938年現在、カレッジ1校(学生239人)、中等学校3校(生徒938人)、初等学校86校(生徒9,307人)であった。当時、朝鮮における女子教育の規模を見れば、1938年現在、高等教育機関(専門学校、師範学校、大学、学種専門学校)は、8校(女子学生2,003人)、女子中等教育機関(公私立高等女学校、実業学校、実業補習学校、学種中等学校)は、197校(女子生徒21,532人)、初等教育機関(官公立初等学校の初等科と高等科、各種初等、簡易学校)は、6,168校(女子生徒664,746人)であった<sup>38)</sup>。こうした女子教育の実態から見て、WFMS が朝鮮で展開した女子教育において最も貢献したのは、やはり女子高等教育であったことが分かる(女子高等教育機関の在学生のうち、11.9%はWFMSの女子カレッジ生)<sup>39)</sup>。

WFMS により世界の各宣教地で実施された女子教育は、その規模も他の教派を凌駕するが、何より特筆すべき特徴は、女子高等教育を実施した点である。次の表3は、1910年現在、WFMS が世界の宣教地で開いていた女子カレッジの現況である。ブルガリアのほかはすべてアジアで、合計6校のカレッジまたはカレッジレベルの課程が開設された。朝鮮では、1910年に梨花学堂に大

学科（5カ年）が新設され、学生7人が在籍した。

〔表3〕WFMSの女子カレッジ（1910年）

地域	教師の数			学生数
	婦人宣教師	外国人	現地人	
インド北部	6	8	7	165
華中	3	-	3	10
福州	5	-	-	36
西日本	-	1	1	7
朝鮮	3	-	1	7
ブルガリア	2	-	9	59

出所：Annual Report of WFMS, 1911（拙稿2016年、329頁から再引用）

WFMSは、1910年にイギリスのエディンバラで開催された世界宣教師大会で、宣教地における教派連合カレッジまたは総合大学の設立案が採択されたことをきっかけに、教派連合女子カレッジの開設に力を注ぐことになった。WFMSの女子カレッジを母体にして教派連合女子カレッジを開設するか、WFMS女性宣教師が中心となって教派連合女子カレッジを新設するか、宣教地によって多様に対応した。1938年にWFMSの女子カレッジは、アジアにのみあり、合計11校（単独2校、教派連合9校）で、インドに4校、中国に4校、日本に3校、朝鮮に1校である。学生数も増加し、あわせて1,647人が在籍していた<sup>40</sup>。

WFMSが女子カレッジをアジアに開設する理由は、現地の女性指導者（特に女教師）を養成するためであったが、それをアメリカ女性（女性宣教師や財政的な支援を送るアメリカの女性たち）の手によって行うことに大きな意義を見出した。たとえば、「これらのカレッジは、東洋の4億の女性たちのためにクリスチャンリーダーを供給する源泉になっている。……東洋の女性たちは自分たちの使命を自覚しなければならないが、われわれは彼女らをユニオン・カレッジで養成しなければならない。……【カレッジの】女性たちは、不当な考え方によって押しつぶされ、苦痛や恐怖にさらされている自国の女性や子どもを救おうとしている。……あなたたち【アメリカの女性たち】がこれらの東洋の女性が最も必要とする助けから目を逸らした時、特権を受けているあなたたちは、次の言葉を記憶せよ。『イエスは手がない、あなたの手のほかには。今こそ主の仕事をせよ。助けを拒まないで』<sup>41</sup>と。

WFMSの女子高等教育観の他、女子カレッジそれぞれにおいて具体的にどのような教育を行ったかについて、比較の観点から詳細に明らかにする必要がある<sup>42</sup>。朝鮮に渡った女性宣教師の女子高等教育観については後述するが、アメリカ人女性宣教師たちによってアジアに設立された女子カレッジそれぞれの設立経緯、教育理念と方針、カリキュラム、入学者や卒業者の特徴などの

分析は、今後の課題にしたい<sup>43</sup>。

## 第2節 女子教育観

WFMSは、なぜ、アメリカ女性を海外に送りだしたのか。第1章の朝鮮女性や日本女性に対するWFMSの認識から分かるように、WFMSは、「憐れな」異教地の女性たちを「文明化」するため、キリスト教主義の教育を与えることを目的とした<sup>44</sup>。学校教育のほか、医療活動や宣教活動を通して、一般住民、特に村の女性たちにキリスト教を宣べ伝えるのはもちろん、衛生教育や育児教育も行った。そこには、アメリカ女性の責務という意識があった<sup>45</sup>。「私たちは、私たちの力で、数千人の異教地の姉妹たちを助けることができる。……もし、その姉妹たちに対する私たちの義務を行わなければ、神は私たちを恥じる」<sup>46</sup>と述べられたように、それは、「進んだもの」（アメリカ女性）に「遅れたもの」（異教地の女性）を助ける使命を課する考えである。当時、多くのアメリカ女性たちが海外伝道運動に呼応したのは、これらの意識が広く浸透した結果とも言えよう。

こうした基本理念により、WFMSは、世界の各宣教地で積極的に女子教育を行ったが、朝鮮に渡った女性宣教師たちは、クリスチャン家庭を築く女性、教育された母の養成に、女子教育の目標を置いた<sup>47</sup>。この女子教育観は、女性の領域は家庭であり、家庭のあり方は社会・国家のあり方を決定するので、良き妻・母になるために女子教育が必要であり、教育された母・母性の力が家庭を超え、社会に及べば、社会・国家はより浄化され改善されるという考え方（当時のいわゆるヴィクトリアンのジェンダー観念）による<sup>48</sup>。

この女子教育観は、教派や派遣先を問わず、当時の女性宣教師たちに共通に見られる。それに関連してダナ・L. ロバート（Dana L. Robert）は、女性宣教師がアジアで女子教育を始めた目的として次の4点を挙げた。「第一に、キリスト教に人々がほとんど関心を示さない異教地において、女学校を始めることは、宣教のために人口半分に当たる女性に接近する最も良い道である。第二に、女性に読み書きを教えることによって、女性が能力を持っていること、女性が闇に包まれ隔離されたところで生涯を送るべきではないことを、現地社会の男性たちに証明できる。第三に、教育を受けたクリスチャン女性を養成することは、今後出てくる男子牧師やクリスチャンワーカーに妻や協力者を与えるために必要である。最後に教会の宣教活動のための一番重要な理由として、女子教育こそが異教徒社会の根幹を取り壊し、キリスト教への改宗を広く成し遂げるに必要な社会変化をもたらす」<sup>49</sup>と。

女子教育により女性を変える、その女性により人々の意識や家庭を変える、家庭の改革により朝鮮社会を根本的に変革するという、母や主婦から始まる朝鮮社会の立て直しを展望したのが、女性宣教師の女子教育観だったと言えよう。しかし、前節で見たように、初等教育が中心であった朝鮮で女性宣教師が具体的に意味したクリスチャンホームとは、決して抽象的な概念ではなく、

「母が聖書を読む能力を持ち、自分の子どもを教える家庭」<sup>50</sup>であった。読み書きができる母が聖書の教えにしたがって家庭の中で子どもを訓育するのがホームという。生産、生計、生活、祭祀の共同体としての一家、子孫の生産・育児、義父母・親戚の奉養、祭祀の準備、家事を担う一家の嫁としての女性という当時の認識からすると、母（子どもの教育者）の役割が主軸となるホームとは、朝鮮人にとって全く新しい概念であった。

女性宣教師による女子教育は、朝鮮人にすんなりと受け入れられたのではない。朝鮮で女子教育を始めた時から20世紀初期にかけて、女性宣教師は、朝鮮で女子教育を行うのがいかに困難あるかを WFMS 本部に多く報告した。たとえば、女子教育に対する朝鮮人の最初の反応を次のように述懐した。

人は純粋な慈悲心により海を渡って知らない人の中に入っていきことができるというのを、異教地の人々はあまり理解できない。朝鮮人たちはこう言った。「そうだ。そのような考えは、良いと思う。アメリカ人が私たちの貧しい少年たちを教えるために、また、私たちの病人たちを治療するために来るのは、嬉しく思う。女の子のための学校って？いいえ。私たちはそのような話を聞いたことがない。女の子は文字を習う能力がないし、たとえあるとしても、何の意味がある？……女性は従順であれば良いのだ。キリスト教？もちろん私たちは、それぞれの国は自分の宗教を持っていることを知っている。私たちも私たちの宗教を持っている。先祖はそれに満足してきたし、私たちもそうだ。だめだ。あなたたちがここ【朝鮮】でキリスト教を教えようとしたらいけない」<sup>51</sup>。

また、朝鮮に渡った直後、まず第一に女の子をいかに集めるかという難問に出くわしたスクラントンは、その経験を次のように述べる。「私は多くの貧しい孤児について聞き、即時に、2人を私の住居に引き取ると言った。……私は新しい建物が建つまで待ちたくなかった。私がいる今の環境から始めたかった。私は朝になるまでどうするか考えて計画を立て、何度も計画を練り直した。……私の責任で2人ではなく6人を引き取ることにした。私に孤児について話をした人に私の決心を伝え、希望を持って待った。何日かが経ち、私が受けた答えはただこれであった。『女の子を探すのは難しい。男の子はたくさんいるが、小さい女の子は売られている』」<sup>52</sup>。「10歳の女の子が一人学校に入った。彼女と一緒に暮らしている。とても厄介な子だが、決して諦めない。子どもが外国人を信頼するようにするには、たくさんの努力が必要だが、多くの場合、成功している。私は彼女が教育を終えた後、彼女を束縛したり、不当な影響を及ぼしたり、彼女の意思を無視してアメリカに連れていったりしないと約束する文書を渡した。彼女はとても喜んで満足した」<sup>53</sup>。

このように、女子教育に否定的な朝鮮人の考え方や生活慣習は、女性宣教師の活動に立ちはだかる困難であったが<sup>54</sup>、日露戦争をへて日韓併合へと、他民族による支配への危機感は、朝鮮社会に前近代思想に対する批判を引き起こし、女子教育に対する人々の考えも見直しを受けた。そ

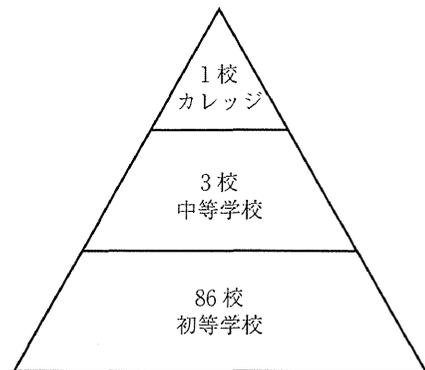
のような変動の中で、女性宣教師は、梨花学堂（初等や中等教育を実施）の成果が、朝鮮人に女子教育の可能性と必要性を目覚めさせたを見た。梨花学堂が女子教育の最初のモデルとして、女性は学習能力を持っていること、科学的知識を学べばより良い母や主婦になれることを証明したから、各地方の宣教区にも初等学校の開設が容易になったという<sup>55</sup>。



梨花学堂、HWF (1889, Jan.) より

ともあれ、初等教育、中等教育、さらに高等教育へと、朝鮮における WFMS による女子教育は、拡大の一途を辿る。女子カレッジの開設に誰よりも貢献したフライ (L. E. Frey) は、梨花学堂の校長として、1910 年、女子カレッジ構想をはじめて明らかにした<sup>56</sup>。梨花学堂には、中等課程の上級課程として 1908 年に高等科が、次いで 1910 年に大学科 (5 年) が設置されていた。フライは、朝鮮女性の「真の向上」のために、アメリカ女性に必要とされる同等のカレッジ教育を朝鮮女性にも与えるべきであると認識し<sup>57</sup>、女子カレッジの開設に向け努力したが、宣教師や朝鮮人の中に反対意見もあって実現できずにいた。「教師を養成する女子カレッジは、きわめて重要であり至急必要である。もし、私たちのミッション・スクールに、この女子カレッジの卒業生を送ることができなければ、私たちのミッション・スクールは、その質を保ち維持するのが難しい」<sup>58</sup> という女性宣教師の内部からの危機感も高まり、ようやく 1922 年、梨花学堂の大学科を拡充し、教派連合の女子カレッジを設立することになった。しかし、長老派教会の協力を得られないことが明らかになり、教派連合女子カレッジの開設は挫折したが、1925 年に専門学校規則による梨花女子専門学校 (英語名は、Chosen Woman's College、または、Ewha Woman's College) が設立された。

ここで、初等学校からカレッジまで一貫する WFMS による女子教育が成立した。それは、下の図から分かるように、カレッジ (京城) を頂点として、その下に中等女学校 (京城、平壤、海州)、さらにその下に初等学校 (京城、京畿地方、濟物浦地方、黄海道地方、平安道地方など) が立ち並ぶ「教育ピラミッド」の完成であった。これは、初等学校を出た女の子のうちの何人かは、村を出て寄宿舎を備えている上の女学校へ、その女学校を出たまた何人かは、カレッジへ進むという、上へ、上へと人を送りだすピラミッドである。それと同時に、カレッジを出た人は教師として女学校



WFMS が作り上げた「教育ピラミッド」

へ、女学校を出た人は教師として初等学校へ戻るといふ、下へ、下へと人を派遣するピラミッドでもあった。言ってみれば、この「教育ピラミッド」により育て上げられた朝鮮女性たちが、朝鮮の津々浦々に送り出され、村の子どもたちや女性たちに働きかけるという循環が出来上がった。「女性を変え、家庭や社会を変える」といふ上述した女性宣教師の女子教育の信念は、「教育ピラミッド」を作り上げ、その「教育ピラミッド」は、女子教育の成果を生み出したといえよう。

さらに、「教育ピラミッド」は、村の人々の意識の中に教育熱、特に上級学校への進学熱を引き起こす機能を果たした。女性宣教師の報告によると、村の住民たちの関心は、村のどこの家の誰が女学校へ進んだといふ話、A村からは何人が女学校へ進んだといふ話、自分の村に女教師を確保するため誰かを女学校へ送るといふ話に集中した。次の引用は、平安北道寧邊郡にある寧邊初等学校（1906年に6人の女の子で開設）に関するモーリス（Louise O. Morris）の報告で、最初の卒業生のうち4人が京城の梨花学堂中等科に進学するため、村を出発した日の風景を書き記したものである。村の人々の意識の中に刻まれていく「教育ピラミッド」の存在を、垣間見ることができる。

晴れた月曜日の朝、羨ましがる友たち、誇らしげに思いながらも心を痛める親たち、お別れに来た学校の同級生たちに囲まれて4人は、これからの奮闘の日々を前にして出発した。道端の人々の視線は彼女らに集中し、彼女らを見たクリスチャンたちは大喜びだった。なぜなら、上の学校を目指して故郷を出ることは、かつて、朝鮮のこの村には決して見られなかったからだ。彼女らは、汽車、彼女らをチャンスの地に運んでくれるその汽車に乗るため、50から65マイルを歩いてきたが、最高の温かい見送りを受けながら、未来へ向かう彼女らの上りは始まった<sup>59</sup>。

初等学校からカレッジまで、それぞれの段階を組む女子教育を通して、女性宣教師が育てようとした朝鮮女性の具体像は何か。まず、村の初等学校を出た女子生徒は、村で女性宣教師や朝鮮人女教師の補助的な仕事にたずさわる。そして聖書教師になるための訓練を受け、教会や地域で奉仕する。女子生徒の一部は、故郷から離れ、都会の中等学校に進み、終了すれば故郷にもどり、結婚前には村の初等学校で子どもを教える。そして結婚後には、教会や地域における女性たちのリーダーとなる。さらに女子生徒の一部は、カレッジに進み、中等学校の教師になり、女性宣教師に代わりうる人材になる。

女性宣教師が育てようとした朝鮮女性は、女性の役割に関する彼女たちの本来の考えに基づいていた。女性宣教師は、上述したヴィクトリアン的ジェンダー観念によって、女性の役割は社会に開かれていると見た。しかし、それは、多くの場合、母や主婦的な役割を家庭を超えて、社会の中でも果たすことを意味した<sup>60</sup>。もちろん、女性が男性と全く同じ理由で社会で働くことに賛同する考え方もあったが<sup>61</sup>、社会進出が女子教育の主な目的に掲げられたのではない。女性宣教師にとって、朝鮮女性が女教師になることは、社会・国家における女性の役割（母・主婦）を変

えるためではなく、母や主婦的な役割を社会の中で果たすために先頭を行くことだったと言える。

前節で見たように、WFMSは朝鮮で女子教育を始めたにせよ、植民地時代における女子教育の一部分を担ったにすぎない。WFMSの教育により輩出された初等・中等・カレッジの女教師も数的には決して多くない。しかし、彼女らは女教師として教会や地域においてもリーダー的な役割を果たした。彼女たちは女性宣教師が目指した女子教育の結実として、以前には存在しなかった新しい女性として朝鮮の津々浦々に現れた。言い換えれば、彼女たち自身が女性の変化、家庭の変化、社会の変化を証したのであり、その証しは朝鮮人にとって大きな意味となった。

## おわりに

本稿では、朝鮮における女子教育を始めたWFMSを中心に、女性宣教師は、朝鮮女性と日本女性、そして両国にかかわる国際情勢についていかに認識したのかを考察した。また、WFMSにより朝鮮で実施された女子教育の規模について、日本や中国の場合と比較して検討した。最後に、女性宣教師の女子教育観を論じた。

本稿では、女性宣教師の認識を明らかにすることに目的を置き、彼女たちの教育を受ける朝鮮女性に対しては検討しておらず、また、女性宣教師が作り上げた「教育ピラミッド」の中で具体的にどのような教育活動が行われたかについても考察を加えなかった。

女性宣教師が行った女子教育の意義や限界については、他の論稿で言及したのでここでは省くが、朝鮮に渡ったアメリカ人女性宣教師は、新しい女性の役割を教え、新しい女性を育て、朝鮮社会の各地方に送り込み、新しいジェンダー意識を普及するエージェントだったという点は強調しておきたい。最後に今後の課題について触れる。

第一に、本稿ではWFMSの朝鮮認識と日本認識を取り上げたが、中国認識も分析し、比較する必要がある。それらの認識が各宣教地における女子教育のあり方に及ぼした影響についても明らかにしなければならない。

第二に、同じく比較の観点から、朝鮮、日本、中国それぞれにおいて女性宣教師により実施された女子教育の実態を詳細に分析する必要がある。カリキュラム、生徒、卒業生などへの検討は欠かせない。

第三に、女性宣教師は学校教育を担当する場合も、教会で女性たちにバイブルを教えたり、伝道活動の一環として地域の女性たちの中に出かけていき、様々な啓蒙活動（衛生教育、育児教育など）を行ったりした。学校教育の他、女性宣教師たちが行った社会における教育活動も明らかにする必要がある。

第四に、女性宣教師側の資料の他、ミッション・スクールの校友会誌や同窓会誌なども用い、

女性宣教師による女子教育の受容について分析を深める必要がある。

## 注

- 1 *Year Book of WFMS*, 1939, p.146.
- 2 韓国における女性宣教師研究の現状に関しては、拙稿「朝鮮におけるアメリカ・プロテスタント宣教師による女子教育—米国南長老教会朝鮮ミッションを中心に—」筑波大学大学院人文科学研究科紀要『歴史人類』第43号、2015年、103-126を参照。
- 3 小檜山ルイ「アメリカにおける海外伝道研究の文脈とその現在」国際日本文化研究センター紀要『日本研究』第30号、2005年、79-98頁；棚村恵子『しなやかに夢を生きる—青山学院の歴史を拓いた人ドーラ・E. スクーンメーカーの生涯—』青山学院、2004年；安倍純子『ヨコハマの女性宣教師メアリー・P. ブラインと「グランドママの手紙」』EXP、2002年；石井紀子「中部ウーマンズ・ボードの自立への動き—アメリカン・ボードとの関係において（1868-1910）—」『キリスト教社会問題研究』第47号、1998年、81-107頁；内藤知美「明治期における来日婦人宣教師の研究—A. M. Drennamを中心として—」『人間文化研究年報』第18号、1994年、149-156頁；小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師—来日の背景とその影響—』東京大学出版会、1992年；戸田徹子「アメリカにおける婦人外国伝道協会の成立」『アメリカ史研究』第10号、1987年、40-55頁；本多繁「メソジスト監督教会婦人外国宣教協会と明治前期における日本での活動—東北地方を中心として—」東北学院大学東北文化研究所『東北学院大学東北文化研究所紀要』第17号、1985年、1-42頁；青山さゆり会編『青山学院史』青山さゆり会、1973年をはじめとする各ミッション・スクールの学院史など。
- 4 石井紀子「女性宣教師と女子教育」『立教アメリカン・スタディーズ』第39号、2017年、103-117；キリスト教史学会『近代日本のキリスト教と女子教育』教文館、2016年；拙稿「帝国の女教師たち」江藤秀一編『帝国と文化—シェイクスピアからアントニオ・ネグリまで—』春風社、2016年、322-362頁など。
- 5 斎藤元子『女性宣教師の日本探訪記—明治期における米国メソジスト教会の海外伝道—』新教出版社、2009年。
- 6 J. T. Gracey, "The Women of Korea," *HWF* (1883, Feb.), p.178.
- 7 "Fifteenth Annual Meeting of the General Executive Committee of the Woman's Foreign Missionary Society," *HWF* (1884, Dec.), pp.121-122.
- 8 "New England Branch," *HWF* (1885, Feb.), p.188-189.
- 9 "Uniform Study for July," *HWF* (1890, Jun.). ページ番号がない。
- 10 E. W. Rice, "A Woman of Korea," *HWF* (1886, Feb.), p.183.
- 11 E. D. Appenzeller, "Korean Girls," *HWF* (1888, Aug.), p.48.

- 12 A Letter of Scranton(1893年2月3日付), "From Missionary Letters," *HWF* (1893, Jul.), p.16.
- 13 M. J. Bengel, "The Pear Flower School of Korea," *HWF* (1893, Apr.), p.230.
- 14 J. T. Gracey, "Mission Work in Korea," *HWF* (1894, Jul.), p.2.
- 15 A Letter of Scranton, "From Correspondence," *HWF* (1885, Jul.), p.10.
- 16 M. F. Scranton, "From the Seat of War," *HWF* (1894, Oct.), p.102.
- 17 A Letter of Scranton(1897年11月付), "Seoul, Korea," *WMF* (1898, Jan.), p.199.
- 18 M. F. Scranton, "With the Sword of the Spirit," *WMF* (1909, Jul.), p.230.
- 19 "Colossal Burdens," *WMF* (1910, Oct.), p.358.
- 20 C. L. McDowell, "Easter Sunday in Seoul," *WMF* (1912, Apr.), p.116.
- 21 この点に関する WFMS 本部の認識の例を示すと、次の通りである。「朝鮮の運命がどちらに転ぶか分からない。朝鮮における政治政策、教育政策、経済政策を日本が指示しているのに、日本と朝鮮のキリスト教教会がもっと霊的になり、宣教の熱望で満ちていなければ、物質主義が勢いを増し、教会の努力は失敗に終わるだろう。総督府は立派な女学校を建てており、学校内部もよく整備されているはずだ。物質主義の観点から見れば、私たちのミッション・スクールの教室は、天井が低く、暗く、寒く、あまりにも大きな差を感じる。……公立学校はミッション・スクールと違って高い学費がかからないが、及ぼす影響はすべてキリスト教主義から離れている。……ミッション・スクールはどうすれば公立学校と競争して勝利を収められるか」"A General Survey of the Field," *WMF* (1912, Nov.) p. 411.
- 22 東アジアへ渡った日本人女教師に関しては、拙稿、前掲書、2016年と、拙稿「植民地朝鮮に渡ったコロニアル・ミッションナリー—日本人女教員を中心に—」京都大学史学研究会『史林』第79巻1号、2014年、171-203頁を参照。
- 23 斎藤元子は、前掲書の中で、*HWF* における日本関係記事について取り上げた。しかし、全般的な項目の叙述にとどまっており、女性宣教師は日本女性をどのように認識したかについて分析していない。
- 24 このような見方は、梅本順子によれば、明治期に日本に渡った欧米女性にも共通に見られる。梅本順子「欧米女性が見た明治期の日本—日本女性観を中心に—」日本大学『国際関係研究』第33巻2号、2013年、22-33頁。
- 25 F. B. Harris, "How are we to reach the women?," *HWF* (1876, Oct.), p.80.
- 26 J. Ashmead, *The Idea of Japan 1853-1895: Japan as Described by American and Other Travelers from the West*, New York & London: Garland Publishing, 1987, p.426.
- 27 E. E. Baldwin, "First Impressions of Japan," *HWF* (1873, Apr.), pp.437-438; "A Correspondent of the 'Northern Christian Advocate' writes thus the Japanese women," *HWF* (1874, Jun.), p.668.
- 28 F. B. Harris, "Our Neighbors' Daughters," *HWF* (1877, Nov.), pp.100-102; "Mosaic," (1878, May),

- p.115; "Letter from Miss M. A. Priest to Mrs. Willing," *HWF* (1880, Apr.), pp.222-223.
- 29 "Japan," *HWF* (1872, Apr.), pp.261-262; F. B. Harris, *Ibid* (1876, Oct.); F. B. Harris, "A Few Words 'by the way'," *HWF* (1877, May), pp.246-247; E. Bussell, "Nagasaki, Its People And Religions," *HWF* (1880, Nov.), pp.98-99.
- 30 E. M. Soper, "Japan's Future Hope," *WMF* (1909, Jul.), p.230.
- 31 *HWF* (1894, Dec.), p.159. 名古屋で活動する牧師 (D. S. Spencer) が寄せた文章からの引用で、女性宣教師のものではないが、同様の認識が宣教師社会に共有されていたと見なし、引用する。
- 32 G. Baucus, "Jack, The Giant-Killer, A Modern Version," *HWF* (1895, May), pp.304-305; G. Baucus, "Work for Soldiers in Yokohama," *WMF* (1905, Apr.), pp.115-119.
- 33 増田久美子 「『共和国の母』から『慈悲深き帝国』時代の女性たちへ—二つの版の『ノースウッド』にみるセアラ・ヘイルの思想的変遷と『慈善』—」『アメリカ研究』第49号、2015年、135-156頁などを参照。
- 34 たとえば、ヘティー・トマス (H. Thomas) は、WFMS 本部に送った書簡の中に次のように記した。「神様の召命を受けた時、私はリファレンス委員会に、中国か、日本か、朝鮮に行きたいと述べた。私は3カ国すべてには行けないので、天の父はコスモポリタンの活水に行くようにしてくださった。活水では何らかの方法でこの3カ国に触れることが出来るのだ」(当時、活水女学校と活水女子専門学校には、アジアからの留学生が結構いたことを意味していると思われる) "Our Missionaries," *WMF* (1907, Jul.) p. 263.
- 35 J. M. Cheer, "A Glance at Corea," *HWF* (1884, Apr.), pp.227-228.
- 36 G. Baucus, "Japan Woman's Conference," *WMF* (1905, Jul.), pp.229-230.
- 37 朝鮮のミッション・スクールに赴任していた日本人女教師について報告した例を挙げると、次のとおりである。L. M. Swearer, "Kongju School Report," *Reports of the Korea Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church*, 1930, p.14; G. Dillingham "Pyeng Yang Educational Report," *Ibid.*, 1930, p.21; B. Overman, "Haiju District Educational Work," *Reports of the Korea Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church*, 1929, p.21; M. S. Norton, A. H. Norton "Report Lucy J. Scott Girls' School of Haiju," *Annual Report of the Korea Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church*, 1916, p.20; L. E. Frey, "Ewha Haktang, 1916," *Ibid.*, 1916, p.51; M. S. Hess "Educational Report of Chemulpo District," *Annual Report of the Korea Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church*, 1915, p.12; L. E. Frey, O. F. Pye, L. Wood "Ewha Haktang," *Ibid.*, 1915, p.45. また、東京女子大学から3人、津田塾専門学校から7人、青山女学院 (英文専門科など) から2人が、卒業後、朝鮮へ教師として渡ったことが、それぞれの校友会誌や同窓会誌の調査から分かった。
- 38 朝鮮総督府学務局 『朝鮮諸学校一覧』1938年度、1-4頁。

- 39 しかし、朝鮮における女子中等・高等教育において、ミッション系学校が占める割合は高い。1935年度、女子中等教育機関の場合、全体生徒の65.4%にあたる2,459人がミッション・スクールで学んだ。女子高等教育機関の場合、全体在籍者2,150人のうち、1,289人(60.0%)がミッション系専門学校生であった。朝鮮総督府『朝鮮総督府統計年報』1935年度。
- 40 *Year Book of WFMS*, 1939, p.159.
- 41 H. W. Peabody, "Building Colleges for the Women of Asia," *WMF* (1921, Dec.), pp. 428-430. 他に E. R. Nicholson, "Why Union Christian Colleges in the Orient," *WMF* (1921, Nov.), p.382なども参照。
- 42 女子カレッジの家政学科に関しては、拙著、『朝鮮女性の知の回遊—植民地文化支配と日本留学—』山川出版社、2005年、111-132頁を参照。
- 43 これに関連する先行研究として、拙稿、2005年、2015年、2016年の他に、石井紀子「ウーマンフッドを超えて—明治期日本のアメリカ女性宣教師の高等教育推進に見られるプロフェッショナルリゼーション—」『アメリカ・カナダ研究』第19号、2002年、85-122頁を挙げる事ができる。
- 44 たとえば、「私たちは、朝鮮、日本、中国、インド、ペルシアの女性たちを見てきたが、彼女たちの置かれた状況はアメリカの若い女性とは違う。……私たちは満場一致して、それぞれの状況や程度の違いはあるにせよ、それらの国々における女性の抑圧は、彼女たちが教育を受けていないことからくるものと考え。ならば、メソジスト監督教会の女性らは、クリスチャン教育こそが、病んでいる女性たちへの唯一可能な治療法であることを信じ、クリスチャン教育は宣教活動において重要な役割を果たさなければならないと信ずるのは当然だろう」と。E. L. Huray, "A Word of Experience," *HWF* (1891, Oct.), p.85.
- 45 拙稿、前掲書、2016年を参照。
- 46 J. E. Willing, "Under Bonds to Help Heathen Women," *HWF* (1869, Aug.), pp.20-21.
- 47 たとえば、KWCMの女性宣教師は、「私たちの目標は、女子生徒が朝鮮女性に見られる無知と迷信から脱皮できるように教育することであり、衛生観念に富んだ良き主婦になるように教えることである」と述べた。また、教派不明の女性宣教師は、「クリスチャン教育は、神によって結ばれた男女の真の結婚をもたらし、愛をベースとするクリスチャンホームを作ることにある」と述べた。J. O. Paine, L. E. Frey, "Ewha Haktang, Seoul," *Annual Report of the Korea Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church*, 1903, p.7; R. A. Winn, "The New Wife a New Woman," *KMF* (1921, Jan.), p.21.
- 48 ヴィクトリアン的ジェンダー観念とアメリカ女性海外伝道運動との関係に関しては、Patricia R. Hill, *The World Their Household: The American Woman's Foreign Mission Movement and Cultural Transformation 1870-1920*, Ann Arbor; The University of Michigan Press, 1985; Dana L. Robert, *American Women in Mission: A Social History of Their Thought and Practice*, Macon Georgia; Mercer

University Press, 1997 を参照 .

- 49 Dana L. Robert, *Ibid*, p.83.
- 50 G. Dillingham, "The School the Girls Built," *WMF* (1913, Sep.), p.309.
- 51 L. C. Rothweiler, "Our Work in Korea," *WMF* (1909, May), p.153.
- 52 A Letter of Mrs. Scranton, "From Correspondence," *HWF* (1886, Apr.), p.249.
- 53 A Letter of Mrs. Scranton, "From Correspondence," *HWF* (1886, Oct.), p.98.
- 54 「朝鮮には中国の纏足慣習がないので、嬉しい。……朝鮮人は、女には教育が要らないと思っているので、女の子は学校に行かない。私たちは、このような考え方が一日も早く変わることを願っている」 M. Howard, "What are Korean Children Like?," *HWF* (1889, Mar.), p.251.
- 55 「女の子に食べ物や衣服を与えて、学校で時間を過ごさせることは、最も馬鹿げた浪費であると思なされた時は、デイ・スクールは不可能であった。女の子も男の兄弟と同じく教育を受ける能力があること、学校から学ぶ知識は主婦・母という女性の義務を果たすのに要らないものではなく、むしろその知識によってもっと良い主婦や母になれること、イエス・キリスト教が人生の中心になれば、より良い主婦や母になれることを、梨花学堂が証明して以来、やっとデイ・スクールは受け入れられた」 L. C. Rothweiler, "Our Work in Korea," *WMF* (1909, May), p.154.
- 56 L. E. Frey, "Higher Education for Women in Korea," *KMF* (1910, Jul.), p.180.
- 57 L. E. Frey, "Higher Education for Korean Girls," *KMF* (1914, Nov.), pp.307-309.
- 58 A. Appenzeller, "The Proposed Women's College," *KMF* (1920, Oct.), p.202.
- 59 L. O. Morris, "Starting for Boarding School," *WMF* (1910, Jul.), p.230.
- 60 「朝鮮においてかつての女性の領域は何だったか。家事を行い、子どもの食べ物や衣服をこしらえ、主人に仕え、姑のしもべになり、祭祀を準備することだった。いかに制限され、愛や自由が欠けていることか。しかし、古いものは去っていき、クリスチャン文明の到来によって、女性は惨めで恐怖に満ちた人生から抜け出し、愛や自由の世界に移りつつある。女性の真の領域は何ぞや。夫の配偶者であり助力者である。主婦であり、子どもを訓練し教える母である。それだけではない。自分の欲求を大事にし、真の隣人になり、教会や地域での役割をも果たすべき存在である」 J. H. McCutchen, "The Education and Training Best Suited to Fit the Korean Woman for Her Real Sphere," *KMF* (1915, Jan.), pp.114-115.
- 61 「私は、アメリカ女性のための高等教育とまったく同じ視点から朝鮮女性のための高等教育を賛成する。なぜなら、人種と国の違いが、神の姿に似せて創造された被造物の特権を生まないからである。世界の女性の中には妻、母、子どもの教育者にならない人がいる。時には選択によって、時には必要によって、男性と同じような仕事に就く女性もいるではないか」 G. H. McGrary, "Higher Education for Women in Korea," *KMF* (1916, Aug.), p.214.